

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381233

研究課題名(和文) 思春期における造形表現の質的变化をふまえた美術教育の方法論に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical Research on Art Education in Methodologies Based on Qualitative Changes in Artistic Expression During Adolescence

研究代表者

新井 哲夫 (ARAI, Tetsuo)

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：40222715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、課題研究23531217「思春期における造形表現の質的变化をふまえた美術教育の方法論に関する研究」の成果をふまえ、それを発展、深化させたものである。

本研究では、思春期の子どもたちの造形的な心象表現(描画や彫刻)に見られる停滞の原因は、一般に信じられている批判的な意識の高まりによる自信喪失ではなく、言語の運用能力の発達に伴う造形的な心象表現に対する関心の低下とそれに付随する表現意図の形成の困難にあることを明らかにし、その改善方を提示した。また、授業実践を通じて、指導計画及び指導方法に関する改善の視点から、思春期の子どもたちの造形表現の特質をふまえた美術教育の可能性と課題を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research draws upon, develops, and analyses the results of research project 23531217, "Research on Art Education Methodologies Based on Qualitative Changes in Artistic Expression during Adolescence."

The results showed that the stagnation experienced in artistic expression (drawing) by adolescent children is not caused by a loss of self-confidence due to an increased awareness of criticism, as is generally believed; rather, interest in artistic expression decreases with the simultaneous development of linguistic ability. The reason lies in the difficulty to give form to their intended expressions. Following this observation, we have suggested a plan, with a view to improving instruction programs and methods. Through class practice, we discussed the possibilities and issues involved in art education, based on the characteristics of artistic expression as exhibited by adolescent children.

研究分野：社会科学

キーワード：思春期の美術教育 子どもの描画の発達の縦断的研究 描画の質的变化 言語の発達と描画の発達との関連 造形表現のメカニズム 創造活動の二つのタイプ 表現主題 リアリズム

## 1. 研究開始当初の背景

思春期は、「子ども」から「大人」への過渡期であり、生涯発達のプロセスにおける最も深刻な危機の時代と言われる。思春期の危機は、造形表現（特に描画）の世界にも見られるものである。それはこの時期に、子どもの描画に対する関心が、図式的な表現から対象の視覚像の客観的な描写（一般に視覚的写実表現と呼ばれる）に大きく転換することに伴い、多くの子どもが視覚的な写実表現に困難を感じ、描画そのものを放棄するに至るからである。このような思春期における描画の危機は、子どもの自由な自己表現を重視する児童中心主義の考え方が学校教育における美術教育の基本理念となって以来、内外を問わず実践者を悩まし続けてきた極めて深刻な問題である。

研究代表者は、平成23年度から25年度までの3年間、科学研究費を受けて「思春期における造形表現の質的变化をふまえた美術教育の方法論に関する研究」（基盤研究(C)課題番号23531217）に取り組み、思春期における造形表現の危機について、先行研究を批判的に検討するとともに、心理学、芸術学、教育学の知見を総合することによって、危機の最も重要かつ本質的と考えられる原因と、危機を克服するための方策について種々考察を加えた。その成果を簡単に述べれば、以下のようなものである。

- (1) 子どもの認知的能力の現れとしての描画と表現活動としての描画とは、同じ描画でも意味が異なるが、それを同一視してきたことがこれまでの描画指導の問題であり、克服されるべき課題であること。
- (2) 美術科教育の目的は、美術やデザインを身近な生活や社会を構成する不可欠な要素として捉え、生涯にわたって親しむことのできる市民を育てること、したがって単なる作品づくりや趣味的な鑑賞で終わることなく、表現＝制作や鑑賞の活動を通して、造形表現のメカニズムや表現の多様性を理解できるようにすることが重要であること。

以上のような成果とともに、さらに検討が必要な課題も明らかになった。それは、美術科教育の教育内容そのものの見直しと、それを題材として具体化し、実践するための方法に関する検討である。

前回の研究において研究協力者を依頼した小・中学校教諭から引き続き研究への協力が得られることになったため、残された課題についてさらに検討を加え、課題の解決を図る目的から本研究を行うこととした。

## 2. 研究の目的

思春期（青年前期と同義、以下思春期と表記）における描画に対する苦手意識の高まりは、自由な自己表現を重視する児童中心主義の考え方が美術教育の基本理念となって以来、美術教育における最大のアポリアであり、その克服が求められながら有効な手立てを

見出せないまま今日に至っている古くて新しい問題である。

本研究は、思春期に広く見られる造形表現（特に描画）に対する苦手意識の高まりを、造形表現の発達過程において生じる表現そのものの質的变化に起因するものとして捉え、それを克服するための手立てを表現活動の内的メカニズムの面から検討し、教育現場の実践的な要請に応え得る方策を明らかにしようとするものである。

## 3. 研究の方法

目的を達成するために、以下の3つの課題を中心に研究を行った。

### (1) 子どもの描画の発達に関する縦断的研究に基づく思春期の発達特性の見直し

従来の美術教育における描画の発達研究は、そのほとんど横断的研究によるものである。その結果、子どもの生活年齢とそれに対応する描画の平均的な発達レベル（ただし描画の形式的な変化について）を明らかにすることはできるが、一人の子どもの発達過程を、連続的な変化として捉えることができないという弱点がある。造形表現の発達における「過渡期」としての思春期の問題を考察するためには、縦断的研究によって、発達のプロセス、特にある段階から次の段階への発達の背景や、言語などの他の能力の発達との関連を明らかにする必要がある。

### (2) 造形表現のメカニズムに対するメタ的理解を促すため教育内容及び方法に関する検討

作品づくりを目的に、単発的な題材によって、「描く」「つくる」活動を行っているだけでは、子どもたちが表現活動についてメタ的に理解することは不可能である。活動を十分に楽しめるようにすることはもちろんであるが、それに加えて、自らの活動を対象化し、他者の表現とも比較したり、関連付けたりしながら、その活動に含まれる意味を理解できるようにする必要がある。

そしてそのような活動を通して、造形的なものの見方やとらえ方に関する基礎的な力を身に付けるための方法を明らかにする必要がある。

### (3) 思春期の子どもの造形表現上の発達特性をふまえた美術科教育のあり方の検討 実践事例の収集と分析を中心に

実際の美術科教育をめぐる環境は、授業時間数の極限的な現象に象徴されているように、きわめて厳しい状況にある。理論的な探究に加えて、そうした学校教育の現状を踏まえた思春期の美術教育の課題を明らかにする必要がある。

本研究では、思春期の子どもを対象とした授業実践等の記録を収集し、現在の学校教育における美術科教育が置かれている条件の下で、実際に何が求められ、何が可能なのかを明らかにし、現実的な方策を探る必要がある。

#### 4. 研究成果

##### (1) 子どもの描画の発達に関する縦断的研究に基づく思春期の発達特性の見直し

一人の子どもが、1歳前後から15歳(中学校3年)までに描いた670枚余の描画(描いた日にちが明らかな描画で、本人が自発的に描いたもの)を対象に、縦断的な視点から、描画の発達の具体的な推移を調査し、分析を行った。

その結果、明らかになったことは以下のようなことである。

描画の発達と言語の発達には深い関連があり、幼児には言語(岡本夏木のいう「一次的事ば」)の発達が図式的な描画(リュケのいう「知的リアリズム」)の発達を後押しする一方、小学校入学後「二次的事ば」を身に付けていくのにしたがって、図式的な描画が抑制され、対象を客観的に描こうする、いわゆる「視覚的リアリズム」の傾向が高まっていくこと。

視覚的リアリズムへの関心は、分析の対象とした子どもが描画に対して早熟であったこともあるが、6歳半ば頃からその芽生えが見られ、9歳を過ぎる頃にはかなり高い描写力を身に付けていること。

しかしそれにもかかわらず、自発的な描画は小学校中学年以降に激減しており、それと入れ替わるようにストーリー・マンガに対する関心が高まり、月刊マンガ雑誌を手づくりして発行するなど、盛んに描いていること。

従来から思春期が描画を敬遠する理由として、認知的能力の発達がもたらす批判的意識の高まりと、それに伴う描画に対する自信の喪失が原因とされてきた。しかし、少なくとも分析対象の子どもの場合、それが全く当てはまらず、優れた描写力を身に付けていながら、描画から離れていること。

上の結果から、思春期における描画の問題は、単に技術的な問題に起因するというよりも、言語の運用能力の高まりや、成長発達に伴う行動様式の変化と活動範囲の拡大、興味・関心の多様ななどの多様な要因が複雑に関連することによる、絵を描くことの必要性や必然性の低下に起因すると考えられること。

したがって、思春期における描画の指導を考える場合には、そうした関心・意欲の低下や動因形成の難しさを念頭に置く必要があること。それとともに、美術科教育のトータルな目標として、どのような資質・能力を育てるのかを明確にした上で、他の分野や領域の指導と関連付けながら、造形や美術に関わる興味・関心や、表現=制作や鑑賞=批評に関するトータルな資質・能力を育てる必要があること。

##### (2) 造形表現のメカニズムに対するメタ的理解を促すため教育内容及び方法に関する検討

この課題については、造形表現のメカニズムの問題と、思春期の美術教育における教育内容の問題を中心に検討した。

##### 造形表現のメカニズムと創造活動の二つのタイプ

「造形表現のメカニズム」とは、描画や彫刻をはじめ、デザインや工作・工芸を含めた造形的な創造活動の正確やプロセス、そのプロセスを生み出す制作者の内的直観や想像力、創造的な思考の働きなどの造形表現の仕組みのことである。

ところで、造形表現(造形的な創造活動)といっても、ジャンルによって性格が異なる。松原郁二(『新しい美術教育理論』1972)のいう「心象の自由表現」(絵画や彫刻などの心象表現)と「生活造形の創造」(デザインや工作・工芸などの適用表現)とでは、創造活動の性格やプロセスが異なっている。

後者の創造活動は、制作の目的や条件が明確であり、制作の意図を共有しやすく、発想段階と制作段階の間に独立した計画段階が存在するなど、創造のプロセスが比較的明瞭であり、作業を段階的に分けやすい。したがって、個人制作だけでなく、共同制作も行いやすい(一般社会のデザインプロセスは、専門分野の異なる者同士でチームを組み、それぞれの持ち味を生かして協力して作業することが普通である)。最も苦しくかつ創造的な段階は、アイデアを思い付き、それを明瞭な計画に練り上げる発想の段階であるが、目的や条件などを共有しやすいため、複数の人間が共同でアイデアを出し合えるよさもある。

それに対して、前者の心象表現は、基本的に個人の主観的な経験(例えば同じ美しい風景を見ても、そこから何を感じ取るかは十人十色である)が表現の出発点となるため、自分が表現したいこと(表現主題)を他の人と共有することができないばかりか、言語などの手段によって説明することもむずかしい。それは、その表現したいことがはじめは明瞭なイメージを伴って作者に自覚できているわけではないからである。心象表現の表現主題(萌芽的な表現主題)は、当初は漠然としたあたりのようなものとして、あるリアリティをもって作者に抱懐されているだけである。作者は、手探りで何かを探す時のように、デッサンや制作を続けながら、自分が直観的に感じ取ったそのあたり(=感動)の核心を炙り出し、徐々に明瞭化していく。それが心象表現の表したいこと(表現主題、表現意図)や創作のプロセスの特色である。創作が理想的な形で進めば、表したいことの実現が作品の完成となる。

このような創造の過程は外から見えにくくだけでなく、作者自身にとっても集中力と忍耐力を必要とする作業である。

このような表現主題追求の過程を、自らの創作過程を例に挙げて記しているものに、アンリ・マティスの『画家のノート』(二見史

郎訳,1978)がある。少し長くなるが、20世紀を代表する画家による貴重な証言であるので、以下に引用しておきたい。

「...私は自分の興味をひく人物の前に立ち、鉛筆か木炭を手にして、多少とも自由勝手にその外観を紙の上に定着させる。こうしていると、とりとめもない会話をして自分でしゃべったり、相手の言うことをまるで逆らわずに聞いたりしている間に、私の観察力を自由に働かせることができる。(略)半時間か一時間もすると、紙の上にはいま接している人物の多少とも正確な、似たイメージが少しずつ現れてきておやっと驚く。

このイメージはまるでそれまで視界を遮っていたガラスの曇りを木炭の一筆一筆が拭い去るように私に見えてくる。

これは概して最初のポーズ時間のささやかな成果である。そうなると、仕事を続行するためには二回目のポーズの時までの間一日二日放っておく方が賢明なように思われる。この合間のうちに頭のなかで何か無意識の発酵が起きるのである。そして、この発酵のおかげで、一回目の制作中に主題[モデルのこと=引用者]から受けとった印象をもとにして、最初の接触のときの成果以上の正確さをもって知的に素描を再構成することになる。

最初の試作を見直してみると、掛け値なしにそれは弱く見える。しかし、この不確かなイメージのもやを透かして私はしっかりした線の構成を感じとる。それが私の想像力を自由にし、次の回の仕事では想像力はこの構成から生れるインスピレーションとじかにモデルから来るそれとに従って働くようになる。モデルは私にとっては限られた私の視野を解放してくれる線とかヴァールールとかの飛躍がそこから生まれ出てくる独特なテーマ以上のものではない。(略)一般に今回[二回目=引用者]のポーズ時間の印象に応じて現れてくるのは線的な構成である。一回目の対面の最中に確かめた事柄は最も大切な特徴、作品の生命となる実質を表わすようにするために消されてしまう。

何回かの制作が同じ精神で続けられるが、おそらく二人の外面的な事柄についてはお互いに最初の日以上に多くを知り合うわけでもあるまい。とはいえ、お互いの心の暖かみを感じとらせるような何か感情的な解釈が生まれて、結局は油絵の肖像という成果となったり、モデルの印象を《早描きデッサン》で表現できるようになったりするだろう。

私は自分の主題[モデル=引用者]を深く知るようになったわけである。多少ともしっかりと結びついたさまざまな分析の上に築かれた長い木炭の制作の後に、表面は多少簡略に見えても、芸術家とそのモデルの内的関係の表現であるヴィジョンが現れてくる。制作中になされた細やかな観察を

すべて含んだ素描からまるで池のなかの泡のように内部で発酵したものが湧き出してくるのである。」(p.206-207,ゴシック体は引用者による)

このマティスの言葉から、描画における作者の「表したいこと」(表現主題、表現意図)がどのような性格なものか、実感できるのではあるまいか。

もちろん、このような深淵な創造のプロセスを、経験の乏しい小学生や中学生が簡単に理解できるわけではない。しかし、マティスのような卓越した画家であっても、描こうとすることがはじめから明確に決まっているわけではなく、毎回毎回全く新しい眼で対象を見つめ、まだ見えない何かを見つけ出そうとして悪戦苦闘している姿を直観的に感じ取れるはずである。

こうした実作者の言葉と重ね合わせて作品を鑑賞することによって、鉛筆で下絵を描き、それをくまなく彩色することが作品の完成であると思っている子どもや、対象を写真のように似せて描くことが絵として優れていると思っている子どものそれまでの常識に揺さぶりをかけることができる。そして、このような学習経験を、自らの創作経験に関連付けることによって、描画に対する誤った認識を修正し、「造形表現のメカニズム」に対する理解を深めることができよう。

単に、描いたりつくったりしているだけでは、造形的な創造活動に対するメタ的な理解は望めない。とりわけ無邪気に描いたりつくったりすることに抵抗を感じている思春期の子どもだからこそ、それに意識的、自覚的に向き合うことが可能なのである。

#### **思春期の美術教育における教育内容について リアリズムの問題を中心に**

思春期の子どもは、認知的な発達により、物事を客観的に捉えようとする意識が高まるが、それに伴い描画に対しても、G. H. リュケが「視覚的リアリズム」と呼ぶ対象の視覚像を忠実に描こうとする傾向が強まる。しかし、リアリズムの主要な技法である透視図法的遠近法や陰影法は、意図的・計画的・継続的な訓練を通じて習得しない限り、自然成長的に身に付けられるものではない。

現在、日本だけでなく先進諸国の学校教育においては、そうしたリアリズムの教育は敬遠される傾向にある。その理由として、以下のような要因を指摘することができる。まず一つは、美術の表現が多様化している現在、自己表現の手段としてリアリズムを特別に重視する意味がなくなっていることであり、もう一つは、写真や映像の技術が飛躍的に発達している今日、対象の客観的な記録はそうしたメディアが担っており、誰でも簡単に利用できるため一般に広く普及していることである。つまり視覚的な画像の記録の手段としてのリアリズムの存在意義がほとんど失われていることである。三つ目は、リアリズムの技法の習得には、時間をかけた訓練が必

要であることである。上に挙げた2つの要因とともに、授業時数の限られた図画工作や美術の授業に、リアリズム教育を取り入れなければならない根拠が薄れているといえる。

しかし一方、リアリズムは、単に視覚的なイメージの客観的記録という一面のみにその存在意義があるわけではない。私たちが日常的に意識せずに行っている「見る」という行為は、多分に既成概念の影響や視知覚の恒常性によるバイアスなどが加わったものである。つまり、私たちは普段、ものをそれほど客観的（正確）に見ているわけではない。正確に見ているつもりでも、表面的なものに見方に終始してしまい、その奥にある本質を捉えているわけではないからである。

リアリズムの技法を身に付けることは簡単にできないことであり、他の何かを犠牲にしてまで、長い時間をかけてそのような技法を身に付けることそれ自体には意味がないといえるが、リアリズムを支えるものの見方やとらえ方（＝造形的な見方やとらえ方）について学ぶことには、バーチャルな映像が溢れ、ものの本質が見えにくくなっている今日のような時代においては、きわめて重要な意味を持っている。

しかも、思春期の子どものリアリズムに対するこだわりは、ある意味で普遍的に見られるものである。思春期の美術教育には、そのこだわりをきちんと受け止め、つまりリアリズムの問題から眼を背けずに、それをより適切な認識のレベルにまで高め、リアリズムに対する誤解や偏見から彼らを自由にする責務もある。

授業においてリアリズムの技法を訓練することは、先に記したように実際のでも現実的でもない。しかし、リアリズムの意味を考え、その基盤にある造形的なものの見方やとらえ方について理解を深め、基礎的なものの見方やとらえ方を身に付けることは、それほどむずかしいことではない。それには、必ずしも表現技術としてリアリズムの習得を目的とする必要はなく、演習と鑑賞を関連付けた題材によって、リアリズムの基本的な考え方や方法、ものの見方やとらえ方を体験的に理解できるようにするだけでも、思春期の子どもをリアリズムに対する意味のないこだわり（多く場合無用のコンプレックス）から解放することが可能である。

#### 教育内容に関するその他の課題

描画に対して、思春期における造形表現の質的転換に起因する問題が最も顕著な形で現れることは事実であるが、美術科教育には、描画を含めてさまざまなジャンルや領域が含まれる。子どもたちが美術やデザインの世界にふれ、その魅力を味わい、理解を深めるための入口は、一つではないということである。特に、思春期の子どもにとっては、自らが制作者の立場に立つ表現や制作だけでなく、優れた美術作品やデザインを鑑賞・享受する鑑賞や批評の活動の役割がきわめて重

要な意味をもつ。

文学や音楽、演劇などの美術以外の芸術の世界では、多くの人が、自らが作家や演奏者、俳優などとして振る舞えないことにコンプレックスを感じることもなく、その世界に親しみ、魅力を味わい、自らの人生を豊かにしている。ところが、美術の世界では、描画に対する苦手意識が、そのまま美術全体に対する忌避や敬遠につながってしまうことが少なくない。特に、抽象表現や現代美術の作品に対して、「わからない！」として敬遠する人が少なくない。

このような事態は、9年間に及ぶ義務教育課程における図画工作や美術の教育が、十分に機能していないことを象徴している。つまり、単に絵を描いたり、ものをつくったりすることだけに偏り、描くことやつくることについて考えることや、美術作品の鑑賞に関する教育が疎かにされてきた結果と考えざるを得ない。

ほとんどの人が、実作者としてよりも、享受者として美術やデザインに関わることを考えれば、普通教育における美術科教育、とりわけ真の美術教育が可能になる思春期以降の美術科教育の内容が、どのようなものになるべきか、自ずから明らかになる。

どのような入口から入ったとしても、美術やデザインに対する親しみや愛着が生まれ、認識が深まるような、そして造形的なものの見方やとらえ方が身に付き、自らの造形的な感覚や判断力に自信を持てるような美術科教育の内容やプログラムを準備する必要がある。

### (3) 思春期の子どもの造形表現上の発達特性をふまえた美術科教育のあり方の検討 実践事例の収集と分析を中心に

本研究では、群馬県、埼玉県、東京都、滋賀県、長崎県の小・中学校に勤務する研究協力者に、日頃の教育実践の記録の収集と分析を依頼した。そして年1回、2日間の日程で全体研究会を開催し、各々の実践の口頭発表と討議を行った。

実践の交流を通して改めて確認できたことは、以下のようなことである。

児童・生徒の実態をふまえて、個性豊かなさまざまな創意工夫がなされていること

図画工作や美術が、単に教科としてだけでなく、思春期（プレ思春期）の児童・生徒の成長、特に精神的成長に重要な役割を果たしており、それを意識した教育活動が試みられていること

表現活動と鑑賞活動の連携を意識した意欲的な取り組みが試みられていること

創造的な活動を行うためには、一定の時間的なゆとりが必要である。しかし、授業時数に代表される制度的な要因によって、真の美術教育が可能になる思春期の、あるいはその準備段階としてのプレ思春期の美術教育が、十分に機能を果たせない現状にあ

ること。

以上の研究成果は、著書として出版公開される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

新井哲夫, 美術教育ぐんま塾の試み 図画工作・美術の専門家としての自己確立をめざして, 第四次美術教育ぐんま塾年報 2014, 2015, pp.123-137

新井哲夫, 創造美育運動における戦前・戦後の連続性と非連続性 創造美育運動に関する研究(2), 美術教育学第 37 号, 査読有, 2016, pp.23-37

新井哲夫, なぜ今、授業研究が求められるのか?, 美術科教育における授業研究の進め方(美術科教育学会叢書 第 0 号), 2017, pp.1-8

新井哲夫, 「美術の授業」に関する歴史的研究, 美術科教育における授業研究の進め方(美術科教育学会叢書 第 0 号), 2017, pp.163-173

〔学会発表〕(計 5件)

新井哲夫, 思春期の子どもを対象とする美術科教育の教育内容に関する検討 「図画工作」「美術」の教育内容をどう捉え、どう位置づけるか, 第四次美術教育ぐんま塾 2014 年度夏季合宿, 2014.8.2. 群馬県みなかみ町

新井哲夫, 「創美」以後の戦後美術教育 美術教育は何を伝えてきたのか, 2014 年度川崎市総合教育センター研修「図画工作・美術科教育」, 2014.8.7. 神奈川県川崎市

新井哲夫, 美術教育ぐんま塾の試み 図画工作・美術教師としての自己確立を目指して, 第四次美術教育ぐんま塾閉塾記念シンポジウム, 2015.2.28. 東京都港区

新井哲夫, 創造美育運動における戦前～戦後の連続性と非連続性, 第 27 回美術科教育学会上越大会 美術教育史研究部会(招待講演), 2015.3.29. 新潟県上越市

新井哲夫, 思春期の子どもを対象とする美術教育の役割と課題 表現と干渉の一体化による美術教育の可能性, 平成 27 年度東京都板橋区立中学校教育研究会美術部会夏季研修会(招待講演), 2015.8.4. 東京都板橋区

〔図書〕(計 2件)

藤崎真知代・松村茂治・水戸博道・新井哲夫他 12 名, 教育発達学の構築, 風間書房, 2015. 全 366 頁(175-198)

新井哲夫, その他 12 名, 造形表現の過渡期としての思春期の美術教育, 日本文教出版, 2017. (印刷中)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 哲夫 (ARAI, Tetsuo)  
明治学院大学・心理学部・教授  
研究者番号: 4 0 2 2 2 7 1 5

(4) 研究協力者

飯塚 清美 (IIZUKA, Kiyomi)  
飯塚 淑光 (IIZUKA, Toshimitsu)  
伊庭 照実 (IBA, Terumi)  
大西 智美 (ONISHI, Tomomi)  
小野田 一子 (ONODA, Ichiko)  
梶岡 創 (KAJIOKA, So)  
金子 美里 (KANEKO, Misato)  
上林 忠夫 (KANBAYASHI, Tadao)  
黒澤 馨 (KUROSAWA, Kaoru)  
堤 祥晃 (TSUTSUMI, Yoshiaki)  
永井 浩子 (NAGAI, Hiroko)  
本田 智子 (HONDA, Tomoko)